

朗 読 文

こちらは地獄の底の血の池で、他の罪人と一緒に、浮いたり沈んだりしていたかんだたでございます。何しろどちらを見ても真つ暗で、たまに暗闇からぼんやり浮き上がっているものがあると思いますと、それは恐ろしい針の山の針が光るのでございますから、その心細さと云つたらございません。

その上辺りは墓の中のようにしんと静まり返つて、たまに聞こえるものと云つては、ただ罪人がつくかすかなため息ばかりでございます。これはここへ落ちてくるほどの人間は、もうさまざまな地獄の責苦せめくに疲れ果てて、泣き声を出す力さえなくなっているのでございましょう。ですからさすが大泥棒のかんだたも、やはり血の池の血にむせびながら、まるで死にかかった蛙のように、ただもがいてばかりおりました。

ところがある時の事でございます。何気なくかんだたが頭を上げて、血の池の空を眺めますと、そのひっそりとした闇の中を、遠い遠い天上から、銀色の蜘蛛くもの糸が、まるで人目にかかるのを恐れるように、一筋細く光りながら、するすると自分の方へ垂れて参るではございませんか。かんだたはこれを見ると、思わず手を打って喜びました。この糸にすがりついて、どこまでも登って行けば、きつと地獄から抜け出せるに相違そういございません。いや、うまくいくと、極楽へ入れることさえもできましょう。そうすれば、もう針の山へ追い上げられる事もなくなれば、血の池に沈められる事もありません。

こう思いましたからかんだたは、早速その蜘蛛の糸を両手でしっかりとつかみながら、一生懸命に上へ上へとたぐり登り始めました。もとより大泥棒の事でございませうから、こういう事には昔から慣れ切っているのでございます。

しかし地獄と極楽との間は、何万里となくございますから、いくら焦あせつてみたところで容易に上へは出られません。ややしばらく登るうちに、とうとうかんだたもくたびれて、もう一たぐりも上の方へは登れなくなつてしまいました。そこで仕方がございませうから、まず一休み休むつもりで、糸の中途にぶら下がりがら、遙かに目の下を見下みくだしました。

すると一生懸命に登つた甲斐かいがあつて、さっきまで自分がいた血の池は、今ではもう闇の底にいつのまにか隠れております。それからあのぼんやり光っている恐ろしい針の山も、足の下になつてしまいました。この分で登って行けば、地獄から抜け出すのも、存外ぞんがいわけがないかも知れませう。